

## 徳富蘇峰「同志社への遺言」

伊 藤 彌 彦

### （解説）

ここに掲載したのは徳富蘇峰の絶筆となった「同志社への遺言」およびその関連資料、あわせて次の五点である。

①徳富蘇峰「同志社への遺言」

②徳富蘇峰「同志社への遺言（草稿）」

③遺言執筆時の様子

④同志社総長大塚節治「蘇峰先生の長逝を弔う」（抄）

⑤同志社理事長秦孝治郎「徳富先生と同志社大学」（抄）

徳富蘇峰が亡くなったのは一九五七（昭和三十二）年十一月二日であったが、資料①の「同志社への遺言」は、死の十日前、十月二十三日に書かれた。そして翌日、請われて熱海を訪れた同志社理事長秦孝治郎と同志社総長大塚節治に金百万円と共に手渡されたものである。この遺言は現在、インターネット上に公開されている。同志社大学のホームページから「新島遺言品庫」を開き、目録番号欄に「2088」を入力すると「蘇峰最後に臨

み全同志社に対しての辞」の資料名で掲載されている。是非これを開いて筆者の読みの妥当性を検討していただきたい。

これとは別に神奈川県二宮の徳富蘇峰記念館にはこの遺言の草稿が保存されている。今回、同館のご好意でこの草稿のコピーを入手することができた。これが資料②の「同志社への遺言（草稿）」である。文章や内容は、成稿と草稿でほとんど同じであるが、草稿では日付などの間違いがあるほか、数個所に空白部分（一文字分とか数行分）がある。用語選択に迷い空白のままにしていたと思われる。

ただ同志社に持ち帰られた成稿の方が字体の乱れが激しい。文字に大小があるほか、墨の濃淡、カスレなども加わり、きわめて読みにくいものである。文字は明らかに草稿の方がしつかりと書かれており読みやすいから、難読箇所を解説するうえで草稿が大変役立つことを付けくわえておく。この字体の乱れは、蘇峰の遺言が壮絶な状態で書かれたからであるが、資料③

はそのとき現場にいた秘書塩崎彦市のそれを裏付ける生々しい証言である。人生最後の気力をふりしぼって書かれたものがこの遺言であった。蘇峰としては全同志社人宛のこの遺言を書き終えなければ、死ぬにも死にきれない思いだったのではないだろうか。

資料④、資料⑤はこの遺言を熱海で受け取った二人の当事者が書き残した記事と回想である。これらを採録した理由は、まさにここに蘇峰の遺言の核心部分、同志社人宛の四カ条が初めて活字で紹介されているからである。それらは大塚資料と秦資料では全く同文である。多分、後者は前者をそのまま踏襲したのであろう。しかし今回、現物から読み本を作ってみると、それらにいくつかの疑問が起きた。とくに第四条末尾の「記憶」の読みは、どうみてもあり得ないと感じている。それで今回、不十分なことを自覚しながら筆者は新たな試読を行ってみた。

次に大塚節治の資料④には、徳富蘇峰の密葬と葬儀に出席した直後の、同志社当局者としての生々しい感慨が書かれている。そのなかで大塚総長は、蘇峰がいかに同志社を愛し、同志社のために尽してくれたかを紹介した後、「然るに我等同志社人は先生御在世中にその高恩に酬ゆることの出来なかったことを返す返すも残念に思います。唯々先生の霊前に我等の至らざる罪を詫び、以て御赦しを乞うのほかありません」と続けている。

この大塚節治のことばを私は、単なる儀式用語を超えた責任ある同志社当局者の声として読んだ。蘇峰に対する戦後同志社の

不義理、不作為への「懺悔」である。以前、徳富蘇峰関連資料①（『同志社法学』三七一号）で紹介したことであるが、敗戦間もない一九四七年十一月二十二日に、追放中の蘇峰は、当時の同志社総長湯浅八郎と前総長牧野虎次を熱海に招いて、三つの希望を伝えたことがあった。すなわち、

第一、同志社に何らかの形で所属したい、名誉小使でもいい。  
第二、蔵書、書簡類、原稿などの資料一切を寄贈したいので同志社に徳富記念館の設置すること。

第三、若王子墓地の新島先生の傍に自分の墓を作りたい。と。しかし同志社の態度は冷たく、お墓の件以外は希望を叶えることはなかった。同志社大学の責任者として蘇峰の死を前にして大塚総長の胸に迫るものがあったのだと私は推測する。

秦孝治郎の回想（資料⑤）は、この遺言書を手渡す際に蘇峰が語った内容が記されていることで興味深い。間もなく死ぬことを自覚した蘇峰は、長いそして複雑な軌跡を歩んだ自分の人生の最後の最後で、新島襄と同志社に立ち返り人生最大の意味、価値をそこに置いていたことが読みとれる。さらにキリスト教に關して、「過去に於ける自分の言説に依つて或は背信者の如く誤解されて居るかも知れないが、私は明らかに有信論者であり、基督教徒である。今や平安の裡に神を信ずる者として間もなく新島先生に天上で会うべく、神の御許に行き度い」と告白していた点は意味深長なものがある。蘇峰の葬儀は小崎道雄牧師の司式で霊南坂教会で執り行われた。また晩晴草堂で最期の

世話をした次女徳富孝子<sup>こうじ</sup>など、蘇峰の子孫にはキリスト教信者も多いのである。

さて全同志社人に宛てに記された四カ条であるが、第一条で「同志社大学設立の旨意」を尊重すべきことを謳った。この「旨意」は新島襄から委託されて蘇峰自ら作成したものであるから当然と言えよう。第二条では、『論語・雍也編』の語句を使いながら「学文ハ文質彬彬然ル後君子ナリ」と「文」と「質」ふたつながらの必要と調和を説いていた。蘇峰自身がどのような内容の「文」と「質」を想定していたのであろうかは、第四条とも関連して気になる点である。第三条は他学校に対して同志社の独自性を発揮することを強調する一文である。日本における私学の雄としての同志社の存在を期待していた。

問題は第四条である。草稿ではいくつかの空白があった所で、それは書きあぐねたためであろうと思われる。そして完成したときの成稿でも文字が読みにくい箇条である。誤読の可能性を恐れながらも、私は「学問ハ時ト共ニ運用スベク、決シテ一方ニ偏用ス（ベキニ）アラス。但タ国家民族ニハ必其ノ民族相統ノ理由ニアツテ整調協フモノナルコトヲ警（<sup>かな</sup>）傾セネバナラヌ」と読んでみた。

「時とともに運用する」はジャーナリストらしいことではある。学問は生の歴史と応答しながら行うべきものとする。現実

に働きかけ変革する学問への期待である。

「国家民族」「民族相統」という文言に、戦前の国際政治の荒

波を目撃したジャーナリスト徳富蘇峰のナショナリズム、愛してやまない日本国への関心が表明されている。そして学問との折り合いの必要性を挙げ、「整調協フ」と言う。あまり見かけない「整調」という語句であるが、晩年の著述中に用例を捜してみたがまだ見つからない。ただ『三大人物史』のなかには「四福音書調整」（五一―八頁）という表記がある。「ハーモニー」のことである。それで「整調」の場合も「調整」をひっくり返しただけで、調和・ハーモニーの意味だと解すれば、理念と現実の調和を図る必要を語ったもの、もっと具体的には「同志社大学設立の旨意」の精神と「日本民族」の問題との調和がかなうものでなければならぬと言ふことであらうか。

ここで感じられるのは、一方で若き日に同志社に学び新島襄の聲咳に触れ、自由と独立個人とキリスト教を身に付けた蘇峰、他方で歴史好き政治好きのジャーナリストとして筆一本で愛する日本を動かそうとしたナショナリスト蘇峰、この両面の下での苦難の人生、そして明治以降の日本の屈折した苦難の歴史が凝縮されていることである。

この遺言の翻刻にあたっては人文科学研究所の田中智子先生（現京都大学教育学部准教授）及び人文科学研究所資料係竹内くみ子氏の助力をいただいた。また関連資料の収集に当たっては神奈川県二宮の徳富蘇峰記念館および同志社大学社史資料センター社史資料調査員布施智子氏のお世話になった。重ねてお礼申しあげる次第である。

資料①

徳富蘇峰 同志社への遺言

昭和三十二（年）十月廿三（日）

九十五年ノ舊

学生徳富猪一郎

恭シク校友及

現在当局者同志社

諸先生教授教

員諸兄妹ニ諗ク

――

老生明治十三年五月

廿四日同志社ヲ去ルニ

際シ新島先生ヨリ

写真一枚ヲ拝授<sup>（受）</sup>

其中

欲為大人自太人ト<sup>（大）</sup>

思フ勿トノ一言アリ

此ノ金鍼●●ニ老生

資料②

徳富蘇峰 同志社への遺言（草稿）

昭和三十二 十月廿三

九十五年ノ舊

学生徳富猪一郎

恭シク校友及

現在当局者

同志社諸先生

教授教員諸

兄妹ニ諗ク

――

老生明治十五年

五月十三日同志

社ヲ去ルニ際シ

新島先生ヨリ

写真一枚ヲ拝

授其中

欲為大人自

一生ノ藥石タリ老生

〔生〕

一ノ生間一度必ラス先生の

此ノ高誼ニ報スル所アラン

コトヲ期セリ

――

然ニ馬齡已ニ頤

期ニ迫リ未タ一

事ノ為ス所ナシ

依ツテ私ニ思フニ此上ハ巧遅

ハ拙速ニ若カスト信シ

甚タ<sup>（捐）</sup>綯細ナカラ別紙

額面通り献納致候

若各位老学生ノ所志

ニ一片ノ同情ヲ賜リ

御採納被成下テハ本懐

不過候コト也

――

小生同志社出校ヲ明治

大人ト思フ勿トノ

一言アリ此ノ金

鍼 老生一生

ノ藥石タリ老生

一生間一度必ラス

先生ノ此ノ御高

誼ニ報スル所ア

ランコトヲ期ス

――

然ルニ馬齡已ニ

頤期ニ迫リ未タ

一事ノ為ス所ナシ

依ツテ 思フニ此上ハ

達ニ若カスト

信シ甚タ綯細

ナカラ別紙額

面ノ通り献納致候

若シ各位老学

拾三年五月廿四日トシ

直ニ東京ニ赴キ所

志ヲ行ハントシタルモ一人

モ老生ニ同情スルモノナク

ソノ為メ悵輩ノ●既ニ

十年間諸学苦学

スルニ若カス相決シ然モ

明治二十三年一月廿五

日思掛ケナキ先生ノ昇

天ニ接セントハ此ニ於テ予ノ

半身以上ハ先生

ト共ニ去リタル心地シタリ

今日マテ予ノ蕪荊ノ途

ヲ踏ンテモ尚微力ノ

存スルハ一ハ先生ノ賜

物ナリ残スルノ志ハ

山ホトナレトモ其ノ力ハ

紙片ヲ拳クルニ勝

生所志ニ一片ノ

同情ヲ賜リ御

採納被成下ラハ

本懐ノ至リニ候

――

小生同志社出

校ヲ明治十三年

五月十三日トシ

直ニ東京ニ赴キ

所志ヲ行ハント

シタルモ一人モ老

生ニ同情スルモノナク

ソノ為メ

既二十五日間諸

学苦学スルニ若カ

ス相決シ然モ明

治二十三年一月

廿五日思掛ケナキ

ヘス一面保ク自ラ不敏

ヲ恥チ只一片ノ微志

#### 第一

校祖新島先生同志

社設立大旨義ヲ遵

守シ之ヲ永久ニ

〔継〕  
経続

宏流シ之ヲ徹底セシムルコト

#### 第二学文ハ文質

彬々然ル後君子

ナリノ双輪輪翼  
〔双輪双翼〕

タルコト

#### 第三同志社ニハ同

志社本領アリ決シテ

他学舎他学説

ニ模倣スヘキモノニアラス

先生ノ昇天ニ

接セントハ此ニ於テ

予ノ半身以上

ハ先生ト共ニ去リ

タル心地シタリ今日

マテ予ノ蕪荊ノ

途ヲ蹈ンテモ尚

微力ノ存スルハ

一ハ先生ノ賜ナリ

所スル志ハ山ホト

ナレトモ其ノ力ハ

紙片ヲ拳クルニ勝

レス面 自ラ不

敏ヲ恥チ一片ノ

微志

#### 第一

校祖新島先生

四

学問ハ時ト共ニ運用

スヘク決シテ一方ニ儉

用ス（ヘキニ）アラス但タ国家

民族ニハ必其ノ民

族相続ノ理由ニアツテ

整調協●モノナルコトヲ

警聴セネハナラス

以上昨日ノ老生

半●半明<sup>〔聰？睡？〕</sup>

紙ニ向ツテ●ヲ奮フサヘ

困難

ナルコト多言ヲ要

セス希クハ老生ノ妄

言御寛恕ヲ祈ル

但タ明治廿三年一月

先生遺言重

同志社設立

大旨義ヲ遵

守シ之ヲ永久ニ

経続<sup>〔繼〕</sup>宏流シ之ヲ

徹底セシムルコト

第二 学文ハ

文質彬彬然ル

後君子ナリノ双輪<sup>〔双〕</sup>

輪翼タルコト

第三 同志社

ニハ同志社本

領アリ決シテ他

学舎他学説

ニ模倣スヘキモノニアラス

第四 学問ハ時

ト共ニ運用スヘク

決シテ一方ニ儉用

スヘニアラス但タ國



大文章カ曾テ予カ手ニ  
成リシヲ思ヘハ予ノ大  
ナル文句上ノ不完成  
ハ返ヘス〜も

御捨用ヲ

乞フ

三十二年十月廿三

蘇峰 九十五

家民族ニハ必ス  
民族相 ノ理  
由ニアヘテ整調  
協 モノナレトモ

以上昨日ノ老生

半●半明紙ニ

向ツテ

困難ナルコト多言

ヲ要セス希クハ

老生ノ妄言御

寛恕ヲ祈ル

但夕明治廿三年

一月先生遺言

重大文章カ

曾テ予カ手ニ成リ

シヲ思ヘハ予ノ大

ナル文句上ノ不

完成ハ返ヘス／＼も

御捨用ヲ乞フ

三十二年十月廿三

蘇峰 九十五

（封簡表）

「大塚先生 秦先生 他諸先生」

（封簡裏）

「熱海市伊豆山 徳富猪一郎」

### 資料③

#### 遺言執筆時の様子

「森田（森田子龍・『墨美』編集兼発行人） あの同志社への遺訓と絶筆の色紙を書かれた時の様子をお話してくださいませんか。

塩崎（塩崎彦市・晩晴草堂時代の蘇峰秘書） 昭和三十二年の十月二十三日の午前七時です。同志社に書き遺したいとおっしゃるんですね。今朝は気分がよい。それで先生巻紙を用意しました。机、ソファのセットに用意しました。そこに掛けさせて差上げるのが大変なことでした。ご自分では掛けようという意識がないくらいでした。三人がかりで掛けて頂き巻紙の前に用意し硯を置いてあるわけです。いつもならご自身で筆を執られるのですが、その元気さはないですね。そばで墨をつけて渡してあげる。いつもなら穂先を硯の上で直されるのですがそれもなさらずに書き初められた。筆をいよいよ紙におろそうという時には又意識がしゃんとするのですね。いくらか書いて筆をお渡しになる、又墨をつけて差上げるといようにして書かれました。あの状態で、よくあれだけのものが纏まったと思います。大体要領を得ていますね。

秦（秦孝治郎・法人同志社理事長） 記憶というか意識が朦朧としていて分らない字が二三ありますが、前後はやっぱりし

やんとしていますね。

塩崎 あれに大分長い時間がかかりましたが、それを終って筆をお渡しになった。…」（『蘇峰先生を語る』『墨美』一七六号、墨美社、一九六八年二月）

### 資料④

#### 同志社総長大塚節治「蘇峰先生の長逝を弔う」（抄）

「私は蘇峰先生危篤の報に接し、急ぎ東上して、去る十一月二日午後九時三十三分（熱海標準時）、九十五歳の高齢で熱海市伊豆山晩晴草堂に、眠るが如き大往生を遂げられた、その臨終に侍することができました。また四日の密葬にも参列し、八日東京の霊南坂教会に於ける葬儀には、同志社を代表して弔辞を述べ哀悼の誠を捧げました。

先生が明治、大正、昭和の三代に亘り、その雄渾なる筆力と報国の至誠により我国の思想界、言論界に指導的役割を果たされたことは識者の均しく認むる処でありまして、これは先生の汗牛充棟の大著述にも優って先生御一生中最大の意義をもつものと考えます。

然し乍ら人間一生の意義は、必ずしもその功業の大小に因て定まるものでなく、寧ろこれを貫く至誠無私の赤心に因るものと考えます。私は先生の偉大さを、其の功業と共に、これを貫いた赤心にあると考えます。

先生の日本国を愛せられた赤心は、また新島先生とその遺業たる同志社にも向けられ、永き御生涯を一貫して、新島先生の真骨頂を天下に述べ伝え、また同志社に在る吾々に訓えられたのであります。新島先生は同志社の基を据え、徳富先生はこれを育て上げた方であると云つても過言ではないと考えます。誠に新島先生無くして今日の同志社は無く、また徳富先生無くして今日の同志社は無いと云つても誤りでないと存じます。

明治二十一年、同志社大学設立運動開始に当つては、その「設立之旨意」の起草を始めこれが公表、募金の劃策その他、新島先生には参謀としてこれを助け、明治二十三年一月新島先生永眠に当つては、其の遺言の筆記者、聴取者としてこれを後世に伝え、明治四十五年同志社大学開設に当つては創立委員長として尽瘁し、戦時中特に先生の精神を政治の中心帝都に宣揚して右翼の圧力に対し、同志社を庇護し、終戦後は九十歳の高齢を以て三度同志社を訪れ、以後後進を鞭撻激励し、金百万円のほか、その生涯に亘る全著述及び新島先生愛用の聖書を寄贈せられ、また山中湖畔に於ける双宣荘、双宣園、新宣園等を寄贈せられ、また最近は体育奨励の為十万円を寄与せられました。

更に本年十月下旬、先生永眠の旬日前、長文の遺訓に加えて金壹百万円を与えられました。その他一々枚挙し得ざる数々の厚意を同志社に寄せられたのであります。

然るに我等同志社人は先生御在世中にその高恩に酬ゆることの出来なかつたことを返す返すも残念に思います。唯々先生の

霊前に我等の至らざる罪を詫び、以て御赦しを乞うのほかありません。この上は我等同志社人一同挙手一致全力を挙げて同志社設立の趣旨貫徹に邁進し以て先生の霊に応え奉らねばなりません。茲に感謝と懺悔の微意を捧げ、先生天上の霊に神の御祝福裕かならんことを祈り、且つ御遺族御一同様の上に天父の御慰めを祈念する次第であります。

なおここに先生の遺訓で同時に絶筆となつたものの要旨をのせて校友の皆様と共に大先輩の愛校心と愛国心を偲び心のむちといたし度いと存じます。

第一校祖新島先生同志社設立大旨義ヲ遵守シ之ヲ永久ニ継続宏流シ之ヲ徹底セシムルコト

第二学文ハ文質彬彬然ル後君子ナリノ双輪双翼タルコト

第三同志社ニハ同志社本領アリ決シテ他学舎他学説ニ模倣スベキモノニアラズ

第四学問ハ時ト共ニ運用スヘク決シテ一方ニ僱用スベキニアラズ俣々国家民族ニハ必其ノ民族相（一字不明）ノ理由ニアヘテ（コノ三文字不明）整調協（一字不明）モノナルコトヲ記憶セネハナラス。」（『同志社タイムス』八七号、一九五七年一月二八日）

資料⑤

同志社理事長秦孝治郎「徳富先生と同志社大学」(抄)

「昭和卅二年の晩春頃から先生の健康優れないものがあつて、遂に秋の十月廿四日先生の招致に依つて大塚総長と私とは晩晴草堂に赴いた。先生の容態はすでに重態に進んでいたが、私共の参上した前日にわざわざ床を離れて、同志社に対する遺言をものされたのである。

嘗て新島先生が大磯海辺で徳富先生に口授された遺言を、この度は、徳富先生が自から筆を執つて、われ等に示される心境とに考え至る時すでに約七十星霜を経た頃、同じ相模湾内の熱海海浜に於て、我等は同じような奇しい運命に遭わねばならなかつたのである。先生の文言は左の通りである。

第一 校祖新島先生同志社設立大旨義ヲ遵守シ之ヲ永久ニ継続宏流シ之ヲ徹底セシムルコト

第二 学文ハ文質彬彬然ル後君子ナリノ双輪双翼タルコト

第三 同志社ニハ同志社本領アリ決シテ他学舎他学説ニ模倣スベキモノニアラズ

第四 学問ハ時ト共ニ運用スヘク決シテ一方ニ僱用スベキニアラズ俟タ国家民族ニハ必其ノ民族相(一字不明)ノ理由ニアヘテ(コノ三文字不明)整調協(一字不明)モノナルコトヲ記憶セネハナラス

この絶筆とも云うべき先生の直筆は、母校を思ふ指針であり、博覧強記の文豪としての片鱗が随所に示されては居るものの、巻紙に認められた行文と筆の運びは、既に第一条から第四条に至るまですべて今日迄の思想、理念のエキスであると共に頭脳の最後の限度にまで達した観がある。実に最後の一息である。この会見に於て、病床の中からわれ等二人に、斯く云われた。この長い一生涯の中で二人の知己があつた。一人は云うまでもなく新島先生であり、一人はグラッドストーンである。二人共に熱心な信仰の人であつて、重大問題の前には必ず密室で人知れず祈禱を捧げたのである、過去に於ける自分の言説に依つて或は背信者の如く誤解されて居るかも知れないが、私は明らかに有信論者であり、基督教徒である。今や平安の裡に神を信ずる者として間もなく新島先生に天上で会うべく、神の御許に行き度い。

医師の注意に依つてわれ等は、一度び面接を遠慮した。重ねての「面接で」目録と共に、同志社に託される新島先生(「徳富先生?」)の私書についての希望条件をも確かに承つた。第一回四十分、第二回三十分の面接で、恐らく先生は悉く遺言のお積りだつたであらう、其れから十日に及ばない昭和三十二年十一月二日午後九時三十分晩晴草堂に於て天上の人となられたのである。」「荒木精之編『追想の徳富蘇峰』日本談義社、昭和三十三年、七九一八〇頁)